桜舞う星

サマエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜舞う星

【Ｎコード】
Ｎ９８９１Ｘ

【作者名】
サマエル

【あらすじ】
昨年フォレストに投稿した作品を、そのまま持ってきました。
楽しんでいただけたら幸いです。

大正帝都に魔が迫る時、宇宙の果てから光の勇者が帰って来た。
帝国華撃団とウルトラマンジャックの共闘と、その影で繰り広げられるロマンスを御堪能下さい。
この小説を読み終えた暁には、あなたにも見える、ウルトラの星。

プロローグ～出会いは桜の下で～（前書き）

まずは主人公が地球にやってくる経緯から。

うまくページ変更できないのが悔しい……。

プロローグ～出会いは桜の下で～

～Ｍ７８星雲：光の国～

宇宙の星達の平穏と安定を保つ彼らの故郷、光の国。
その中心に位置する宇宙警備隊本部にて、警備隊長のゾフィーは目の前の弟に感慨深げに声をかけた。

「……、よく来てくれたなジャック」

「挨拶は無しにしましょう。それで、一体何の用ですか？」

若くして全宇宙の防衛の一任される兄に敬意を示すかの如く敬語で、しかも余計な前置きを省いて本題に入った。
それもそのはず。なぜならジャックは、目の前の兄に至急の連絡を受けて駆け付けたからだ。
ゾフィーも同じ考えだったらしく、ジャックの言葉に頷き本題に入った。

「お前を読んだのは他でもない。ある惑星の防衛任務について貰いたいのだ」

やはり…、とジャックは思った。
ジャックも現在７０００歳…人間なら１８歳とかなり若いが、宇宙警備隊の端くれ。
そろそろ自分にも訓練ではなく実際に惑星とそこに住まう生命を守護する役目を担うだろうと、呼ばれた段階である程度の察しはできていた。
これまで磨いてきた己の腕を披露できる興奮と、ひとつの星を守る

という重圧が緊張という形で現れる。
年若い人間特有の様子にゾフィーはわずかに微笑むと続けた。
「ジャック、お前に守ってもらう星……。それは……、……地球だ」
「え…？　ち、地球って……！」
ジャックはあからさまに驚きの表情を見せた。
無理もない。なぜなら地球は、わずか数年前に外ならぬゾフィーが防衛していた星だからである。
その功績が、ゾフィーが若くして隊長となった一番の理由である。
「しかし兄さん、何故僕が……？」
地球はゾフィーにとって大切な星である事は、ジャックもよく知っている。
それなら、新米の自分より優秀で信頼できる部下がたくさんいるはずである。
すると、ゾフィーはこう返した。
「行ってみれば分かる。ジャック、お前でなければならない理由がな」
勿体振る兄の言動にもどかしく思いつつも、聡明な兄の事、何か考えがあるのだろうと、ジャックは納得する事にした。
「分かりました。とりあえずは地球に向かいます」
「ああ、済まない…。ジャック、気をつけてな」

「はい！」

いずれにせよ、待ちに待った初任務に変わりはない。
活気溢れる返事とともに、ジャックは兄の思い出の星「地球」へ出発した。～帝都：上野公園～

春一番に乗って桜の花びらが舞う春らしい景色の中、ジャックは上野公園に来ていた。
地球人の姿に変身し、自分が光の国の宇宙人とばれないように準備は万全である。
御剣　秀介…、それがジャックが地球人として、ゾフィーに与えられた名前だった。
秀介は初めに、この地球の守るべき場所である、日本の帝都・東京に足を運んだ。
これもゾフィーに言われた事なのだが……。

「綺麗な桜だなぁ……」

周囲は見る限り平和だ。
初めての桜に少なからずの感動を覚えた秀介は、兄に言われた大帝国劇場に向かう前にこの上野公園に任務を忘れて入り浸っていたのだ。
任務中に他に興味が移るのも、新米にはよくある事である。
だが次の瞬間、秀介は今まで見とれていた桜の花びらさえ、目に映らなくなる。

「！」

それは、ほんの一瞬だった。

桜の木々の間にチラッと見えた、秀介と同じくらいの女の人…。
初めて地球の女性を見たからだろうか？
秀介は、そのたった一瞬という短い時間の中で、されどその女の人に完全に目を奪われていた。

「（綺麗な人だなぁ……）」

桜に似合う袴姿に、艶やかそうな黒髪。
秀介の脳裏には、彼女の姿がくっきりと写っていた。
もう一度会いたい…。
秀介は、高鳴る自分の心臓の音を、鎮める事ができなかった。

だが、その思いは信じられない形で叶えられる事になる。

「キャーーーーーーー！」

「な、何だ！？」

悲鳴の聞こえた方向に駆け付けると、そこには刀を持った山吹色の機械が屋台を壊す姿があった。

「（何だあいつは！？生き物じゃない！）」

これが今この星を脅かす存在なのか。
秀介は左手首のブレスレットに目をやった。
ゾフィーに渡された、光の国の万能兵器。
そして、秀介が光の巨人に戻るためのカギでもある。
その時、逃げ惑う人々の中、赤ん坊を抱えた母親が足を躓かせて倒れてしまった。

「…、危ないっ！！」

母親に気付いた機械を止めようとする秀介。
だが、その前に何かが機械に当たり、注意を逸らした。「！？　あれは……！？」

秀介は驚きを隠せなかった。
なぜなら、今機械に攻撃を加えたのはついさっき見た、あの女の人だったからである。

「さあ、今の内に早く逃げてください！」

先程と違って凛々しい表情で、女の人は凛とした声を放った。

「は、はい！」

母親はなんとか立ち上がり、一目散に駆け出す。

「さあ、貴方も早く！」

同じように秀介に言う女の人。

だが、秀介は「はい、そうですか」と逃げる訳にはいかなかった。

「何を言ってるんですか！貴女こそ逃げてください！」

秀介がそう叫ぶと、機械はその声に反応し、秀介に襲い掛かってきた。

「キーッ！」

「くっ！（仕方ない…！）」

秀介は左腕を曲げ、顔の右側に向ける。

「危ないっ！」

女の人が叫んだ時だった。

秀介の左手首のブレスレットが発光し、ちょうど腕一本分くらいの光の刃・スパークソードを出現させたのだ。

「ええっ！？」

今度は女の人が驚く番だった。

見た目自分と同い年の何の変哲のない青年が、こんな人間離れした技を見せたのだから、当然である。

秀介も女の人に注目されて気を良くし、機械に対峙した。

「行きますよ！」

振り下ろされた刀を切り上げで跳ね退け、そのまま右側へ真横に一閃する。

すると、機械の装甲に浅いながらも傷が入った。

「（くそっ、やっぱりエネルギーが弱いか…。）」

いくら秀介に力があると言っても、人間体ではどうしても力を充分に発揮できないし、秀介はまだ新米である以上、未熟な面もある。事実、スパークソードを出せたはいいが、それを維持する事も今の秀介には難しい事だった。

「キーッ！」

やはり致命傷ではなかったらしく、機械は再び##ＮＡＭＥ１##に切り掛かってきた。

「くっ！」

迎え撃とうとスパークソードを構えた時、女の人が持っていた刀を抜いて、機械の刀を受けた。

「大丈夫！？」

「は、はい！」

機械が後ろに飛ぶと、女の人は刀を青眼に構え、秀介に尋ねた。

「その剣…、まだ振れますか？」

「ええ、あと一回」

「じゃあ、あの脇侍の一撃を私が受け止めます。そこを両断して下

さい」

「合点です！」

気を抜けば見とれてしまいそうな顔立ちの彼女に答える秀介。
すると、脇侍と呼ばれた機械がこちらへ切り掛かってきた。

「ハッ！」

気合いの声とともに刀を受け止め、女の人は叫んだ。

「今よっ！」

その声に弾かれたように、秀介は脇侍目掛けて走り込んだ。

「てやああぁぁっ！！」

エネルギーを最大限に集中させたスパークソードは先程の軌道に沿って、脇侍の体を上下真っ二つに切り裂いていた。

「ハァ……ハァ……」

「ふぅ……、助かりました。ありがとうございます」

「あ、いえ……こちらこそ……」

刀を鞘に納めた女の人に礼を述べられ、＃＃ＮＡＭＥ１＃＃は慌てて返事をする。

「それにしても、さっきの凄かったですね。腕輪から光の剣が出て

くるなんて！」

マズイ…、秀介は思った。
今のスパークソードはどう考えても普通ではありえない技。怪しまれても無理はない。
しかし、これで自分が光の国の宇宙人とばれる訳にはいかない。
この星の防衛は、あくまでも秘密に行わなければならないのだ。

「いや、そんな……」

なんとかごまかそうとする秀介。
だが、女の人からの言葉は意外なものだった。

「あの……、もしかして貴方も霊力が使えるんですか？」

「え……？え、ええ！そうです、そいつです」

何の事かは知らないが、とりあえず違う解釈をしてくれたみたいなので、それに話を合わせようとする秀介。
すると、女の人はあっさり信じてくれたらしい。

「あ、そうだ。まだお名前聞いていませんでしたよね？あたし、真宮寺さくらと申します。貴方は？」

「えっ？あ……、御剣　秀介です……」

ひそかに胸を撫で下ろしつつ、秀介が応える。

「あ、もうこんな時間。すみません、あたし行かなきゃいけないので……」

「え……、あ……そうなんですか……」

「それじゃあ秀介さん、また会いましょうね！」

そう言い残して、さくらは人混みに消えた。

「……」

秀介はさくらが歩いていった道を、しばらくの間見つめていた。

「真宮寺……さくらさん…」

時は大正一四年四月。
仙台から上京した真宮寺さくらと、Ｍ７８星雲からやって来た＃＃ＮＡＭＥ２＃＃　＃＃ＮＡＭＥ１＃＃…。
蒸気機関によって発展した帝都におけるこの出会いが、後の帝都で巻き起こる事件の中で運命を左右する事になると、二人は知る由もなかった。

《続く》

→次回予告

プロローグ～出会いは桜の下で～（後書き）

《次回予告》

上野公園で運命的な出会いを果たした僕とさくらさん。
でも、さくらさんは新しくやって来た海軍の少尉が気になるみたい…。
そして、兄さんの言っていた内容が少しずつ紐解かれ始める……。

次回、サクラ大戦！

《出撃！花の華撃団！》

大正さくらにロマンの嵐！

僕は、何のためにここにいるんですか！？

出撃！華の華撃団！（前書き）

いよいよゲーム本編に突入です。
改めて見ると、描写が少ないような……。

出撃！華の華撃団！

さくらと別れてすぐ、秀介は目的地の大帝国劇場に向かった。
兄の話によれば、ここがこの星の侵略者に対抗する機関らしい。
劇場が防衛組織というのも変な話だが、兄曰く

「行ってみれば分かる」

という事なので、とりあえずは行ってからという事になる。

「（凄い人だかりだ……。上野公園と変わらないや……）」

ちょうど芝居が終わった頃らしく、玄関口から続くロビーは観客でごった返していた。

「えっと……支配人室だったよね……」

このまま突っ立っていても邪魔になるので、秀介はさっさと目的の場所に急いだ。

「ここか……」

目の前の扉には縦に支配人室と読む札があるため、ここに間違いないだろう。
そして扉越しに伝わってくる威圧感。
少しでも変な真似をしようものなら即刻叩き斬られるような、そんな気さえした。

「（間違いない…、この奥に兄さんの言っていた人がいる。）」

秀介は、緊張とともに扉をノックした。

「失礼します」

すると…、

「おう、遅かったじゃねえか」

「……」

秀介は一瞬、目の前の光景に固まってしまった。
たしか兄の話では、この大帝国劇場の支配人にして、帝国華撃団の総司令の米田一基中将が、自分の上司となる人物である。
当然、それなりの風格と威厳を漂わせる人物を想像する。
しかし目の前の人物は、秀介の想像と掛け離れた人物だった。
昼間から酒をあおり、既にかなり呑んでいるらしく顔が赤い。
だが、秀介が不思議に思ったのはそんな事ではなかった。

「（この人……、酔っ払ってない。）」

「何だ、豆鉄砲喰らったみてぇな顔してよ」

いかにも酔っ払いの口調で言ってくるが、その割には滑舌がよく噛んでない。
目線も、しっかりと秀介を捉えている。
秀介は、目の前の米田中将であろう人物に話し掛けた。

「何故、酔われている振りをなさるのですか？」

「……、なんだ気付いたのか。ちぇ、つまんねぇなあ」
すると、米田は悪戯が失敗したように残念な顔をした。
「だが、この俺の演技を見破ったって事ぁてめぇか。奴の弟はよ」
「奴とは……、ゾフィー兄さんの事ですか？」
「おうよ。俺とあいつは、昔ながらの戦友だったからな」「戦友……。そういえば兄さんも話していました。かつて地球で、ともに戦った者がいると……。」
「ああ、まさしくそれだ。……で、おめぇの名前は？」
米田に聞かれ、秀介は周囲の気配を確認して答えた。
「ジャック……、この星では御剣　秀介と名乗る事にしています」
「御剣　秀介……。けっ、奴と同じでいいセンス持ってやがるぜ」
「その事ですが司令……」
秀介がそう言いかけた時、米田が右手でそれを制した。
「わかっている。この事は、他言無用だ」
その言葉に秀介は、安心の表情を浮かべた。
「で、おめぇの仕事なんだが……。」

米田は机の中の分厚い資料を取り出すと、パラパラとめくりはじめた。

「そうだな……、裏方全般を手伝ってくれや」

「……へ？舞台のですか？」

「ああ。ちょうど人手が欲しくてな。大道具とかその辺りを頼むぜ」

「はあ……」

しっくり来ないが、こういうのは余計な口出しをしないのが定石。秀介は無理矢理そう納得して、支配人室を後にした。

「まさか裏方とは…、ここも人手不足なのかなぁ…？」

そうぼやきつつ廊下を歩いていると、秀介はちょうど曲がり角のところで誰かとぶつかった。

「アタッ！」

「キャッ！」

声からして女性と判断し、秀介は慌てて謝罪を述べる。

「す、すみません！よそ見していたもので……！」

「いえ、こちらこそごめんなさい！」

その聞き覚えのある声にハッとした秀介は、女性を改めてよく見た。
艶やかな黒髪と赤い袴姿は確か……。

「あ、貴女は……、さくらさん！？」

「え……？……！！秀介さん！何でここに！？」

「僕の台詞ですよ！」

なんとぶつかった女性は、ついさっき上野公園で脇侍なる機械を倒した、真宮寺さくらだった。
思いがけない再会に、二人はしばらく立ち尽くしたままだった。一通り裏方の仕事をこなしたのち、秀介とさくらは紹介のために、ほかの関係者が集まるという大帝国劇場２階のサロンに呼ばれた。

「（なんだか女の人ばかりだなぁ……。）」

軽く周囲を見渡し、秀介は心の中で居づらさを感じていた。
自分と米田中将以外は全員が、いわゆる年頃の女性なのだ。
疎外感を感じるのは当然である。

「さて、見ての通り我が帝国華撃団・花組に二人の新人が加わった。
自己紹介を頼むぜ」

先程の支配人室と違い、いかにも軍人らしいたたずまいで言う米田に言われ、先に秀介が名乗った。

「本日より、帝国華撃団・花組に配属されました、御剣　秀介と申します。どうかお見知り置きを……」

すると、それに反応するようにさくらが緊張混じりに口を開いた。

「あ、お、同じく花組に配属されました、し、真宮寺さくらです！よ、よろしくお願いいたします！」

「……いたしませんわ」

さくらの自己紹介が最後まで終わらない内に、二人に視線すら向けずに紅茶を飲んでいた女性が遮るように言った。

紫色の着物をギリギリの辺りまではだけさせ、肩の辺りで短く切り揃えられた茶色の髪と左目の泣きぼくろが印象的な女性は、ティーカップを戻すとさくらに横からの冷ややかな視線を向けた。

「高々この程度の人数で、何をあがっていらっしゃるの？そんな事でこの帝劇の舞台に立てるとお思い？」

「すみれ、出会い頭に失礼を言うものではないわ」

「マリアさん、私は真実を申していてよ」

マリアと呼ばれた女性の制止を無視して、すみれと呼ばれた女性はさらに上からの物言いを続けた。

「だいたい貴方、この帝国華撃団一のトップスター神崎すみれ様と同じ舞台に立つ事が、どれほど素晴らしい事かお分かり？」

「すみれ、自己紹介が終わったなら黙ってて頂戴」

「……もう、仕方ありませんわね」

マリアと呼ばれた女性に咎められ、ようやくすみれは高飛車な物言いをやめる。
それを確認すると、マリアと呼ばれた女性が自己紹介をはじめた。

「私はマリア＝タチバナ。この帝国華撃団の隊長よ。二人とも、よろしくね」

マリアはすみれと違って外国人らしく、短い金髪と黒いコートが印象的な、冷静な人物だった。

「さあ、アイリス。貴女の番よ」

マリアに促されて出て来たのは、まだ１０歳にもならないような小さな少女だった。マリアと同じ金髪にピンクのリボンが愛らしい少女は、にこやかな表情で二人に笑いかけた。

「アイリスで～す。この子はジャンポールっていうの。よろしくね！」

そう言ってアイリスは手に持った熊のぬいぐるみの手を動かした。

「クスッ、よろしくね、アイリス」

「それに、ジャンポールも」
「以上が花組のメンバーだ。普段は帝国劇場の役者として、舞台に立ってもらっている」
米田がそう言うと、さくらは初耳だったのか驚いた。
「ええっ！？……って事は、あたしも舞台に立つんですか！？」
「おう、言ってなかったか？」
「聞いてないですよ！え？という事は……」
「早速、次の芝居に新人として出てもらうわ」
「ええ！？じ、じゃあもしかして秀介さんも……？」
マリアの一言にさらに驚き、さくらは秀介に視線を向ける。
「いや、秀介は裏方全般をやってもらう。なあ秀介？」
「ええ、いつの間にか……」
本人にばれないように非難の視線を米田に向けて呟く。
すると、すみれが突然口を挟んだ。
「お待ちになって。私聞いてませんわよ？」
すみれはさくらを指差すと続けた。

「今度のお芝居で、私は脇役。にも関わらず、こんな新人の大根役者を主役に上げるだなんて、納得いきませんわ！」

「む……」

さすがに目の前で悪く言われたからか、さくらは言い返しはしなかったがジト目ですみれを見ていた。

「あら、新人のくせに文句でもおあり？」

「……ありません」

ジト目のままさくらが答える。
すると、見かねたマリアが仲裁に入った。

「すみれ、今後はさくらも私達の一員なんだから、仲たがいは止めなさい」

「……まあ、初対面ですし、今回はマリアさんの顔を立てて差し上げますわ」

さすがに多勢に無勢と思ったのか、すみれはそう言って足早にサロンを離れた。

「……まあ、こんな感じだが、頑張ってくれや」

「は、はい……」

「努力します……」

つまりはチームワークが乏しい。
帝国華撃団の現状に先が思いやられる秀介とさくらであった。数日後、秀介はロビーの清掃中にさくらを見かけた。

「あれ、さくらさん？」

「……秀介さん。清掃ご苦労様です」

「あ、いや……。えっと、どこかお出かけですか？」

相変わらずにこやかに微笑むさくらに見とれつつ尋ねると、さくらはほんのり頬を赤く染めて応えた。

「はい。今日こちらにあたし達の新隊長がいらっしゃるんです。それで、あたしが案内する事になって……」

「…新……隊長？」

「はい。大神一郎さんと言って、海軍士官学校を首席で卒業された方なんです」

そう言って、さくらは秀介に一枚の写真を見せた。
真っ黒な髪がツンツンと逆立った、いかにも軍人らしい好青年。
もしや……、秀介の脳裏に一抹の不安が過ぎる。

「あの、さくらさん？……もしかしてその人と何か関係がおありなんですか？」

必死に笑顔を作って尋ねる秀介。

すると、さくらは秀介の様子に気付いていないのか、真顔で応えた。

「いいえ、初対面です」

「あ、そうですか……」

安心して胸を撫で下ろす秀介。

しかし、次の一言でその安心は一気にひっくり返る事になる。

「むしろ……これからそんな関係を作って行きたいって……、そう思ってるんです」

「……、はい？」

秀介は耳を疑った。さくらはそれに気付かず、頬を赤く染めて写真を見ている。

いわゆる恋する女の子。

その光景に、秀介は早くもこの世の終わりが来たような感覚に陥った。

それから少しして、さくらがハッとした様子で叫んだ。

「あ、もうこんな時間！それじゃあ秀介さん、行ってきますね！」

秀介の返事も待たず、まるでデートに向かうかのような上機嫌で走っていくさくら。

しかし、秀介には死刑宣告以外の何者でもなかった。

「……」

「あ、秀介。何してるの？」

「……」

「秀介～？」

それから15分、秀介はロビーで固まっていたという。

「ここがあたし達の大帝国劇場です」

「これは……、初めて見ましたが立派な建物ですね……！」

さくらの案内で帝劇にやって来た海軍少尉、大神一郎は、初めて見る帝劇の大きさに驚きの声を上げた。
士官学校を首席で卒業するという優秀な成績に加え、実直かつ真面目で帝都を守るという熱い志を掲げる熱血漢。
正に希代の軍人。
それが大神一郎という人間だった。

「ここはロビーですか。人がいないせいか、静かですね……」

「今日は夜の部だけですから……」

中に入るや、辺りを見渡す大神に微笑みつつさくらが答える。
すると、大神の足下から声が聞こえた。

「きゃは。お兄ちゃん、さくらの彼氏？」

「いいっ！？な、なんだこの子は！」

それはアイリスだった。
その後ろには、やけに口元が引き攣っている秀介の姿もある。

「駄目よアイリス、大人をからかっちゃ。この方は大神一郎少尉。あたし達の隊長よ」

「あたし達って、まさか……」

大神が驚いた様子でアイリスを見ると、アイリスはえっへんと胸を張って答えた。

「帝国華撃団・花組、アイリスです。この子は熊のジャンポール。よろしくね」

「同じく帝国華撃団花組、御剣　秀介と申します。はじめまして、大神隊長」

「ああ。よろしく、秀介。それにアイリスちゃんか……。俺も友達にしてくれるかい？」

大神は秀介と握手を交わし、アイリスに笑いかけた。
すると、アイリスも負けじと大神に笑い返す。

「うん、もちろんだよ。仲良くしてね、お兄ちゃん」
「うふふ、よかったわねアイリス」
すると、アイリスがさくらと秀介に小声で話しかけた。
「ねぇ、さくら……秀介……。」
「何？」
「このお兄ちゃんにも霊力がある……。お兄ちゃんもアイリス達と戦うの？」
「そうですね。」
「……アイリス、戦争キライだよ……。」
「大丈夫ですよアイリス。」
「秀介さんの言う通り、心配はいらないわ。」
「でも……アイリス怖い……。」
「さ、部屋に戻りましょ。本を読んであげるから。秀介さん。」
「分かりました。」
「あの……」

突然ヒソヒソ話を始めた三人に声をかける大神。
すると、さくらが何事もなかったかのように応対した。
「あ、すみません大神さん。あたし達これで失礼するので……」
「あ、ちょっとさくらくん……？」
大神の声を無視して、さくらはアイリスを連れて行ってしまった。
「それでは大神隊長。自分がご案内致します。どちらへ？」
「あ、ああ……。まずは支配人室に案内を頼む。着任報告をするんだ」
「分かりました。こちらです」
「ああ。よろしく頼むよ、秀介」「ちょっと！誰か手を貸して下さいな」
支配人室へ向かう道中、食堂から声が聞こえた。
「ん？何だろう？」
「これはもしや……」
聞き覚えのある悪魔の囁きに、秀介は身を固くする。
対して善人の大神は、あろう事か声のした方向に顔を向けてしまった。
それがいかに命知らずな行為か、大神は身を以って知る事になる。

「あ、そこの貴方」

「じ、自分でありますか！？」

そこにいたのはすみれだった。
やたら露出の多い服装に、純情な大神はたじたじになる。

「ほかに誰がいるの？バカ面してないで、こちらにいらっしゃい！」

「は、はあ……」

それこそ蛇に睨まれた蛙の如く、大神はすみれに歩み寄る。
すると、すみれは自分の足元を指差して言った。

「床に落ちてしまったフォークを、新しいものと取り替えて下さらない？」

「誰が……」

食堂の影に隠れた秀介がぼそっと呟いた。
しかし、大神隊長は信じられない応対をした。

「いいですよ。……はい、どうぞ」

「（……嘘でしょ……？）」

秀介は信じられないものを見た。
何と大神は、すみれの我が儘に嫌な顔一つせず、フォークを取り替えたのである。
今の帝劇にいる人間には誰ひとりとして今のような応対はできない

だろう。
秀介は改めて、大神一郎が油断できない人物と認識した。

「……一体何なんですかあの人は？」
支配人室の前で、秀介はため息をついた。
先程のすみれの時は、
「いいですよ」
気前良くフォークを取り替えて、米田司令に酒を勧められた時は、
「昼間から酒とは何事ですか！！」
と一喝し、さくらとアイリスが案内で揉めれば、
「二人で案内してくれよ」
と丸くおさめてしまう。
そして、つい先程すごい剣幕で支配人室に乗り込んだ所だ。
「そんなに気に入らないんですかね、モギリって……」

翌日、秀介は日課にしているロビーの掃除をしていた。
この日は休演日で客も来ないが、どうせ朝は特にやる事もないので
という事だが、良い習慣ではある。

「さて、こんなものかな……？」

あらかた掃除を終え、いつものように綺麗になったロビーを見渡す
秀介。
すると、彼の視界に昨日来たばかりの新米隊長の姿が写った。

「やあ秀介、掃除お疲れ様」

恐らくは昨日モギリの仕事を抗議に行ったせいだろう。
昨日に比べて笑顔に陰りがあった。
秀介は、敢えてそれには触れなかった。

「大神隊長ほどではありません。貴方こそ、昨日は見回りで大変だ
ったそうじゃないですか」

「ハハ…、ありがとう」

さくらに聞いた話だが、あの抗議の後落ち込んでいた大神はさくら
と二人で帝劇内の見回りをしていたらしい。
アイリスのジャンポールを探したり、売り子の椿に言いくるめられ
てさくらのブロマイドを買わされたり、踏んだり蹴ったりだったそ

うだ。

「仕事内容、納得して戴けましたか？」

箒を片付けつつ尋ねる。

大神は、僅かに間を置いて答えた。

「……やってやるさ。これが俺の仕事だって言うならやってやる。だが、この帝都を守るという決意だけは揺るがない！……決して！」

「……それでこそ、僕らの隊長ですよ」

「秀介……」

「これから舞台で稽古があります。よかったらいかがですか？」

意外そうな表情をよそに言うと、秀介はロビーを立ち去った。

大神はしばらく目で秀介の背中を追っていたが、その背中が見えなくなると、笑みをこぼしてその背中を追いかけた。「……えっと、ここで右足を上げて……」

「さくらさん、足の運びが違いますわよ！」

「お……やってるやってる」

舞台では、さくらのデビュー作でもある『愛ゆえに』の稽古の真っ最中だった。

すみれに何とかついて行こうと必死なさくら。

しかし、その必死さが裏目に出る事となった。

さくらの足が、すみれの着物の裾に、引っ掛かってしまったのだ。

「ひえええぇ……！！」

奇声をあげ、すみれは顔面から床にダイブする。

「ご、ごめんなさい！」

その余りに派手な倒れ方に、さくらは思わず頭を下げる。
起き上がったすみれは、鼻を真っ赤に腫らしていた。

「さくらさん！人の裾を踏み付けるなんて失礼じゃありませんこと！？」

「す、すみません……」

反論の余地なく再び謝罪するさくら。
すると、前々からさくらのデビューに不満を持っていたすみれはここぞとばかりに厭味を並べた。

「全く、これだから田舎臭い娘は嫌ですわ。粗野で、乱暴で、お下品で……」

さくらの口元が一瞬ピクッと吊り上がるのに気付かず、すみれは勝ち誇った表情で背を向けた。

「さ、もう一度始めから行くわよ」

しかし次の瞬間、今度はわざとさくらに裾を踏まれ、すみれは再び正面に倒れた。

「でぇ……ぶふっ！」

「あ～ら、ごめんあそばせ」

あからさまにすみれの口調を真似て言うと、さくらは舌を出した。

「こんのガキャ～……。さくらさん！口で言ってわからない人はこうよ！！」

最早堪忍袋の緒が切れたすみれは、さくらを打とうと平手を出した。

さくらも負けじと平手を返す。

その時、

「二人とも、やめるんだ！！」

突然影が二人の間に割って入り、それぞれの手首を掴んだ。

「秀介さん！」

「少尉まで何故ここに……？」

そこには、さくらとすみれの間に立つ秀介と、袖の方から舞台に走ってくる大神の姿があった。

「ありがとう秀介。おかげで間に合ったよ」

最初に止めてくれた秀介に礼を述べると、大神は二人に声をかけた。

「二人とも、喧嘩はやめるんだ」

大神は穏やかにだが、はっきりと言った。

「俺は芝居に関しては素人だし、偉そうな口を叩く気はないけど、せっかくみんなで一つの芝居を作るんだ。喧嘩はやめようよ」

それは、大神が示した精一杯の正義だった。
帝都を守るはずの自分の仕事がモギリだった事に、大神が落胆しないはずはない。落ち込んでいたのはそのためだ。
しかし、彼の心に眠る意思は消えなかった。
帝国華撃団花組隊長の資質……。
大神には、間違いなくそれが備わっていた。

「大神さん……」

「少尉……」

「……」

「お兄ちゃん……」

一触即発のこの状態を丸くおさめられたのが、何よりの証拠である。

「それじゃ……」

さすがに出過ぎた真似をしたと思ったのか、大神は気まずそうに舞台を後にした。

「……、大神さん！」

思わずさくらが後を追う。
残された四人はしばらく無言で立ち尽くしていたが、やがて秀介が口を開いた。
「……どうやら、司令の理想通りの人物のようですね」
「そのようね。でも、まだ完璧とは言えないわ。なぜなら……」
マリアがそう答えかけた時、警報が帝劇内部に響いた。
帝国華撃団花組の、本来の任務が始まったのである。

「よし、全員揃ったな」
「米田支配人！それにみんな！これは……？」
いつもと違う戦闘服姿の一同に驚く大神。
すると、米田が普段とは別人のような本来の顔で、大神に真実を告げた。
「大神、歌劇団はお休みだ。帝国華撃団は、本来の任務に戻ったのだ」

「本来の任務？ま、まさか……！」

「そうだ。昨日お前に専業モギリと言ったのは嘘だ。お前が真に隊員の生命を尊重し、帝都のために戦える器か……。それを確かめるためのな」

「米田司令！帝国華撃団花組は……、本当にあったんですね！」

大神は嬉しさに身を震わせた。
それもそのはず。
帝都の平和をこの手で守るという士官学校からの夢が、遂に実現できたからだ。

「それで米田司令、我々の敵は一体何者なんですか？」

このような秘密組織が存在するという事は、帝都を脅かす何かがあるはず。
はやる気持ちを抑えて、大神は米田に尋ねた。

「うむ、お前も噂は聞いた事があるだろう。我々帝国華撃団の敵は、怪しげな魔の力で政府転覆を狙う謎の組織。その名を『黒之巣会』という」

「『黒之巣会』……」

米田の言う通り、大神はその名に聞き覚えがあった。
巷の新聞にしばしば取り上げられる怪奇な事件。
謎の侍姿の機械が現れ、放火や傷害といった破壊活動を行っているという。
相手にとって不足はなかった。

「改めて紹介しよう。この五人が、お前とともに戦う帝国華撃団花組の隊員達だ」

米田の指差す先には、普段と違う勇ましい姿の隊員達がいた。

「よろしくお願いします、大神さん」

同じ新人だけに初々しさを感じさせるさくら。

「お兄ちゃん、一緒に頑張ろうね」

幼いながら、天使のような笑顔で場を和ませるアイリス。

「お手並み拝見ですわね」

自信があるのか、普段と同様に余裕を見せるすみれ。

「隊長足るもの、時として非情な決断を迫られる事もあります。少尉がそれに耐えられるだけの方か、見極めさせていただきます」

いつも以上に視線に鋭さを伺わせるマリア。

「我々帝国華撃団、存分に活躍して見せましょう」

優しく、されど熱く決意を述べる秀介。

「よし！みんな、よろしく頼むぞ！」

頼もしい隊員達に頷き、大神も言葉を返す。

すると、再び米田が口を開いた。

「それだけじゃないぞ大神。我々には『黒之巣会』に対抗するための秘密兵器がある」

「秘密兵器……？」

「そうだ、これを見てくれ」

そう言うと、米田は作戦司令室のパネルを操作し、モニターにその秘密兵器の姿を写した。

「これは霊子甲冑『光武』。神崎重工が開発した、霊力を持つ人間にのみ動かせるスグレモノだ。秀介とアイリスの分はまだ未完成なんだけどな」

「『光武』……」

それは、文字通り蒸気と霊力で動く鎧だった。
緑と赤のレーダーに、足元の蒸気タービン。
そして、各々の獲物を手にした四機の光武。
大神は二刀流の使い手なので、二刀の白い光武の担当という事になる。

「それだけじゃねぇ。お前達も目的地に運ぶ設備もある」

米田がそう言った時、作戦司令室に売り子の椿が入って来た。
椿もまた、花組とは違う戦闘服を着ている。

「長官、『轟雷号』の発進準備、完了しました！」

「椿ちゃん！じゃあまさか、かすみくんと由里くんも……」

「そうだ。彼女達三人は帝国華撃団風組。お前達花組を目的地に運ぶ、言わばサポート役だ」

そう言って、米田は大神に命令を出した。

「さあ大神、出撃だ！敵は待ってくれねぇぞ？」

「はい！帝国華撃団花組、出撃！」

大神の号令で、隊員達は一斉に動き出した。

「……どういう事ですか？」

秀介が、ふと米田に尋ねた。

「アイリスがまだ子供だから戦えないという理由は分かります。しかし、僕も出撃できないというのは……？」

「秀介……。お前のその力は、あいつ譲りで凄まじい。お前が行けば、瞬きの間に戦いは終わる。だが……」

僅かに躊躇い、米田は続けた。

「これは帝国華撃団花組の初陣。その最初の戦いでお前の力を借りれば、あいつらは次もお前を当てにする……。冷たいかも知れねぇが、帝都の平和はできる限り人間の手で守るものだ。現にあいつは、一度しか力を使った事はない」

「……」

秀介は答えなかったが、心の中で叫んだ。

「（平和を人間の手で守れるのなら……、僕は何のためにここにいるんですか！？）」

確かに米田の言う事には納得できる。

しかし、それでは自分の存在意義は一体どこにあるのか。

秀介は、新米ゆえに答えを見つける事が出来ずにいた。

昼前の上野公園。

侍姿の魔装機兵『脇侍』が現れて火の手が上がったのは、実に突然の事だった。

人々が逃げ惑う中、公園の鳥居に四つの影が並ぶ。

「アハハハハ……、破壊、動乱、政府転覆、楽しいねぇ」

「帝都は我等黒之巣会が貰い受ける……」
「屍の山を築き、我等が力を見せてくれましょう！のう、叉丹殿？」
「フッ……」
叉丹と呼ばれた銀髪の男が含み笑いを漏らす。
その時、力強い声が響き渡った。
「そこまでよ！！」
刹那、湖から巨大な列車が出現し、中から四機の光武が姿を現した。
「帝国華撃団、参上！」
「帝国華撃団とな？……こざかしい！」
着物姿の女が吐き捨てるように言うと、銀髪の男、叉丹が前に進み出た。
「面白い。ここは私が……」
「ふん、任せたぞ」
言うや、三つの影は叉丹を残して消え失せてしまった。
同時に、屋台を壊していた脇侍達が一斉に花組の方を見る。
「お前達の実力、見せて貰おう！」

「敵の数は7か……。よし、まずは魔装機兵を全滅させる！」

「「了解！」」

威勢のいい返事に、自らの士気が高まる大神。

「（よし、これなら行けるぞ！）」

隊員達とは昨日あったばかりだが、これまでのコミュニケーションで悪い印象は与えていない。
恐らくチームワークもバッチリだろう。
そう考えた大神は、素早く指示を出した。

「マリア、後方から援護を頼む！」

しかしマリアから返って来た言葉は、大神の予想だにしないものだった。

「……、何を言っているんです？この程度の相手に援護が必要なのですか？」

「いいっ！？」

「私はまだ少尉を隊長とは認めてはいません。では、通信を終了します」

一方的にそう言うと、マリアは通信を切ってしまった。
仕方なく大神は、今度はすみれに通信を繋いだ。

「すみれくん、あの……、援護を……」

「おーっほっほっほ……！中々面白い冗談です事。」

しかし、やはり反応は冷たかった。

「こんな雑魚も一人で倒せないなんて、とんだ足手まといですわ。
精々頑張って下さいまし」

「そ、そんな……」

見ればマリアもすみれも、初陣とは思えない程の余裕で脇侍を屠っている。

「……俺の隊長の立場って一体……」

戦場の中、大神のむなしい呟きが響いた。

「ほ～ぉ。あいつらバラバラと思ってたら、意外にやるじゃねぇか」

作戦司令室で戦況を確認していた米田は、感心したように呟いた。
実際に大神の指示を聞いているのはさくらだけなのだが、二人の動きはマリアとすみれの行動を綺麗にフォローしており、一つのチームとしてまとまっていた。
それが出来たのも、偏に大神の指揮能力の高さである。
部下を単なる戦力ではなく、大切な仲間として扱う。
そんな人情溢れた性格も、大神の魅力だった。
特に花組の少女達を娘同然に考えている米田には、大神がとても好印象だった。

「これで、全部か？」

公園内の脇侍をあらかた片付け、大神は辺りを見渡した。
すると、鳥居の奥から叉丹が姿を現した。

「ほう、見事な腕前。私自ら相手をさせて頂こう」

叉丹が刀を抜く。
すると、叉丹を中心に地面に紋章が出現し、周辺の妖気が瞬く間に濃くなった。

「あれは……？」

二刀を構えたまま、大神はその場に立ち尽くした。
叉丹の描いた魔法陣から、光武の倍近い大きさの巨大な魔装機兵が

現れたのだ。

「よし…、敵魔装機兵を撃破する。みんな行くぞっ！」

叉丹と対峙する四機の光武。
その中で最初に動いたのは、すみれの紫の光武だった。

「この私に掛かれば、楽勝ですわ！」

「待つんだ、すみれくん！」

大神の静止を無視し、叉丹に突進するすみれ。
叉丹はニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、太刀を抜いた。

「おどきなさいっ！」

霊力を纏わせた薙刀で叉丹に切り掛かる。
しかし、叉丹は脇侍を尽く屠ったその一撃をいとも簡単にいなして見せた。

「この私を見くびるな」

「くっ……！」

後方に押し返され、すみれは屈辱に顔を歪ませる。

そこへ、大神の通信が入った。
「すみれくん、いくら君でも単機では厳しい。俺が指示を出すから、それに合わせて動いてくれ」
「……仕方ありませんわね。よろしくてよ」
この時、さくらとマリアは僅かに驚いていた。
すみれは人に従う事を極端に嫌い、周囲とのいさかいは絶えなかった。
そんな彼女が戦いで指示を聞くなど今まであるはずがない。
大神の統率力に、マリアは改めて感心した
「よし、まずは俺が注意を引く。その隙にすみれくんは奴の視界を制限。マリアは奴の身動きを封じ、さくらくんがトドメをさす。いいな？」
「「了解！」」
隊員達の返事に頷き、大神とすみれが同時に動いた。
「行くぞっ！」
大神の白い光武が稲妻の如く叉丹の懐を切り付ける。
「むっ！」
叉丹も今の攻撃には反応出来ず、すみれへの注意が途切れた。
「今だ、すみれくん！」

「お任せを！」

先程の仕返しを含め、薙刀に霊力を集中させる。

「神崎風塵流、胡蝶の舞！！」

炎の纏わせた薙刀を気合いとともに地面に突き刺す。

すると、叉丹を囲むように火柱が上がった。

「くっ……！」

「そこっ！！」

間髪入れずにマリアのライフルが火を吹き、叉丹の動きを牽制させる。

そこに、さくらの必殺技が炸裂した。

「破邪剣聖、桜花放心！」

真っ直ぐ振り下ろされた刀の軌道に沿って霊力の鎌鼬が発生し、叉丹の魔装機兵に深々と傷をつけた。

「なるほど……、ここまでとは」

刹那、再び魔法陣が出現した。

「……退け、叉丹」

「蜩か……」

そこに現れたのは、黒装束の忍者だった。
目を残して顔全体を布で覆っているため表情は伺えないが、叉丹を名前で呼んでいる所から彼の仲間である可能性が高い。
「華撃団よ、いずれ決着をつけよう！」
そう言い残し、叉丹は魔法陣の中に消えてしまった。
「貴様、黒之巣会の仲間か！？」
二刀を構えて大神が叫ぶ。
しかし、蜩と呼ばれた忍者は表情一つ変える事なく言った。
「答える必要はない」
「何！？」
「ほんの挨拶がわりだ。精々足掻くがいい」
そう言って札を取り出す蜩。
すると、札は閃光とともに巨大な怪物へと変身した。
人間の体に蝉の顔を合体させたような姿で、両手は蟹のようにハサミになっている。
「こ、これは……！？」
さくらが驚きの声を上げると、怪物は奇怪な声を出して笑った。
「フォッフォッフォッ……！」

「長官、上野公園に巨大な妖力反応が出現しました！」

「何！？」

モニターを見るや、米田は絶句した。
八年前の予言が、遂に現実となったのだ。

「……まさか、一発目に来るとは思わなかったがな」

しかし、あの怪物が今の花組の手に負える相手でない事は明白。
となれば、選択の余地はない。

「秀介、お前の初舞台だぜ。派手に暴れて来い！」

「了解です！」

待ってましたと言わんばかりに答え、秀介は駆け出した。

「……やっぱりお前の弟だな、豊」

「皆さん、今参ります！」

人気のない路地裏に入り込み、秀介は左手のブレスレットに目をやった。
最初の使命の時を告げるかのように、ブレスレットは淡い光を放っている。
「ジャーーーーック！！」
ブレスレットを空に掲げ叫ぶ。
すると、ブレスレットはまばゆい閃光を放ち、秀介を包み込んだ。

それは何の前触れもなく現れた。
怪物に一撃を与え、大地に足をつけたその姿は正しく光。
手首に黄金のブレスレットを、胸に空色のタイマーをつけ、銀と赤の体で怪物と対峙するそれは、仁王のような守護神を想起させた。
「あれは、一体……」
大神はそう呟くしかなかった。
ウルトラマンジャック。
八年の時を経て、光のメシアはこの帝都に帰ってきた。
「シュワッ！」

ジャックは、目の前の怪物に殴り掛かった。
怪物はハサミで受け止めようとするが間に合わず、仰向けに倒れる。

「ヘッ！」

ジャックは馬乗りになって、さらに追い撃ちを掛ける。

「フォッ！」

しかし、今度は怪物を身構えており、ハサミでジャックの手首を掴んで攻撃を食い止め、さらにもう一方のハサミから白色の光弾を放ってきた。

「ァアッ！？」

ダメージこそ少ないものの、至近距離で攻撃を受けたジャックは後方へ吹き飛ばされる。
そこへ、今度は怪物が馬乗りになってきた。
しかし、そう簡単にやられるジャックではなかった。

「ヘアァッ！」

飛び掛かってきた怪物の勢いを逆手にとって巴投げをキメる。

「シュワッ！！」

起き上がりざま、ジャックは怪物の方に振り向くと両手を十字に組み、スペシウム光線を放った。
スペシウムは怪物の顔面を直撃し、大爆発を起こした。

「……シュワッ」

それを確認すると、ジャックの足元から声がした。

「君は一体……？」

それは大神だった。

見ると、ほかの隊員達も光武を降りてジャックを見上げている。

「……私は、ウルトラマン」「ウルトラマン……？」

大神が繰り返すと、ジャックは頷いて続けた。

「そうだ。私はＭ７８星雲からやって来た宇宙人。八年前に私の兄がこの星を救ったように、私もまた、この星を守る事になった」

「君の兄が……？」

「貴方達の勇気に感動した。勝手ながら、今回のような敵が出て来た時は、また助太刀させてもらう」

そう言うと、ジャックは空へと飛び立っていった。

「……何だったんでしょうか？」

四人はしばらく無言だったが、ややあってさくらが口を開いた。

「私達の味方とは、言い切れないわね」
「何だって良いではありませんの。敵でないのでしたら」
「そうだな。ウルトラマン……。もしかしたら本当にともに帝都を守ってくれる仲間かも知れない」
彼の正体が何であれ、ピンチだった自分達を救ってくれた事に代わりはない。
大神は、不思議とあの光の巨人に親近感が湧いた。
「そうだ！事件も解決したし、アレやりません？」
「アレ……？」
「ほらほら、大神さんも行きますよ！せーの……」
何の事か分からず困惑する大神をよそに、三人は同時に叫んだ。
「勝利のポーズ……、決めっ！」
「いいっ！？」

その夜、大神達は米田の誘いで夜の花見に繰り出した。
花組初陣の勝利祝いも兼ねてだったため、皆大いに盛り上がっていた。
そんな中、さくらが大神に声をかけた。

「大神さん、お疲れ様でした」

「ああさくらくん、お疲れ様」

「大神さんのおかげで、あたし頑張れました。これからも、よろしくお願いします！」

「俺だけじゃないさ。あの光の巨人が来てくれなかったら、俺達はあの怪物にやられていた」

すると、そこへ話中の秀介が話に割り込んできた。

「……で、その光の巨人が助けてくれたと」

「秀介さん！？」

「ああ、ウルトラマンと名乗っていた。まだ仲間とは言いきれないが、俺は仲間と信じている」

「あたしもです。何だかあの人とは初めて会った気がしなくって……」

大神の言葉に同意するさくら。
すると、今度はアイリスが大神の所にやって来た。

「アイリスねぇ……、お兄ちゃんの事気に入ったわ」

「え？」

「アイリスの恋人にしてあげるから、浮気しちゃダメよ？」

「あ、ああ……」

ちなみにこの時、さくらがジト目になり、秀介がガッツポーズをしたのは余談である。

「さあ飲め大神。明日からモギリが待ってるぞ」

《続く》

出撃！華の華撃団！（後書き）

《次回予告》

モギリに仕事に大忙しの大神さん。
そんな大神さんの前に現れる謎の美女達……。
あれ……、秀介さん、何で怒ってるんですか？

次回、サクラ大戦！

「運命の出会い」

大正さくらにロマンの嵐！

いいな、恋人みたいで。

運命の出会い（前書き）

サブタイ通りです。
たぶん勘のいい方なら先が見えたかも……。

運命の出会い

「……いでよ……死天王」

暗がりの中に声が飛んだ。
すると、暗がりの中から四つの影が現れた。
ある者は魔法陣から、ある者は地面から、各々の力を見せんとばかりの方法で、声の下に集まった。

「また、わらわが一番乗りかえ？」

江戸時代の女性の服装でカンに障る笑い声を上げる、死天王の紅一点、紅のミロク。

「お生憎様、僕の方が早かったよ」

色の爪をちらつかせる蒼き刹那。

「ハッハッハ……！また俺が最後か！」

刹那の弟にして、怪力の持ち主の白銀の羅刹。

「少し静まれ。天海様の御前だぞ」

そして、上野公園で花組と戦った黒い叉丹。
彼らこそ、この帝都の平和を脅かす花組の敵、黒之巣会死天王であり、彼らの前の王座に座る声の主こそ、黒之巣会首領、天海なのである。

「よく集まった。死天王よ」

四人の部下を見渡す天海。

「して天海様。我等に何用でございますか？」

「決まっておろう、前回の負け戦じゃ」

刹那が尋ねると、天海は俄かに眉をひそめた。

「申し訳ありません、天海様」

「だが、奴らは侮れません」

「黙れ、叉丹、羅刹！」

謝罪と弁明を述べる二人を一喝すると、天海は続けた。

「我等は常に無敵。一刻も早く六亡星降魔陣を完成させ、偉大な徳川幕府を再建させねばならぬのだ」

「「はっ！」」

四人が同時に臣下の礼をとるなか、叉丹がニヤリと一瞬笑った事に気づいた者は、誰もいなかった。

「（ふっ……、死に損ないの老いぼれめ……。）」

大神が花組の新隊長となって早1ヶ月。
すっかりモギリとして定着した大神は、今日も慣れた手つきで仕事をこなしていた。
そこへ、アイリスがやって来た。

「お兄ちゃん、お仕事お疲れ様」

「やあ、アイリス。来てくれたのか」

「うん。だってアイリスは、お兄ちゃんの恋人だもん」

9歳にしてはかなりませた発言だが、悪気はないので大神も苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あ、そうそう！さっきマリアから聞いたんだけど、今日紅蘭が来るんだって」

「紅蘭？一体どんな人なんだい？」

初めて聞く名前に疑問符を浮かべる大神。

「紅蘭はねぇ、ちょっと前に花やしきに行った、花組の隊員なんだよ！アイリスとっても楽しみなんだ～」

「へぇ～……、アイリスは紅蘭と仲がいいんだね」

「うん！だって紅蘭、いつもドッカーンってやるんだもん」
「ドッカーン？なんだか面白そうな人だね」
「うん！お兄ちゃんもきっと紅蘭を好きになるよ！」
余程紅蘭に会うのが楽しみなのか、アイリスはいつも以上ににこやかだ。
それにつられて、大神にも笑顔がこぼれる。
「それじゃあお兄ちゃん、紅蘭が来たら教えてね」
そう言うと、アイリスはスキップしながらロビーを後にした。
「あんなにはしゃいで、余程会いたいんだな……」
そう呟いて、大神は仕事の準備を急いだ。
その時、突然玄関から凄まじい爆発音が轟いた。
「な、なんだ！？」
アイリスの言葉を借りるならドッカーンという爆発音に、大神は慌てて外に飛び出した。
「これは……、自動車事故か？」

見ると、一台の蒸気バイクが大破して煙を上げている。
すると、大神の足元で声がした。
「ゲホッゲホッ……、すんまへん。大帝国劇場って、ここでおますよな？」
「だ、大丈夫ですか？大帝国劇場はここですが……」
恐らくはバイクの運転手だろう。
足元にいたのは紫色の髪を三つ編みにした、眼鏡とそばかすが特徴的な女性だった。
「ウチ、今日からここの配属になった李紅蘭いいます。よろしゅう」

「……支配人」
「おう、入れ」
そう言われ、秀介は支配人室の扉を開けた。

「あん時ゃご苦労だったな。さすがはあいつの弟だ」
相変わらずの飲兵衛口調だが、やはり視線はしっかり秀介に向いている。
「兄さんに比べればまだまだです。ところで、お話というのは？」
「ああ、お前もわかってる事だが、あの怪物についてだ」
話が本題に入るや、米田は司令の顔に戻った。
「奴がお前のいう宇宙からの侵略者なら、次も新たな怪物を呼び出す可能性は高い」
「はい……」
「そこで、お前にも新たに新兵器を用意し、花組とともに戦線に立ってもらいたい」
「了解しました。しかし、」
承諾した上で、秀介は疑問を述べた。
「戦闘中に変身して、気付かれないでしょうか？」
戦闘では常に隊員全員が繋がった状態、則ちチームワークを維持する事が、戦闘において勝利を掴む秘訣である。
しかし秀介が光の巨人、ウルトラマンジャックである事は誰にも知られてはならない。
米田の言う通り、この帝都はあくまで人間が守るべきものであって、

必要以上に秀介が介入する訳には行かないからだ。
もちろん、それは花組にも同じ事が言えた。

「大丈夫だ。詳しい事はまだ言えねぇんだが、そいつは俺に任せてくれ」

「……わかりました」

いずれにせよ、通常の戦いに御剣　秀介として花組に貢献できるのは嬉しい限り。
秀介は米田に一任する事を決めた。
その時、支配人室の扉が再びノックされた。

「米田支配人。大神ですが、よろしいですか？」

「おう、入れ」

「失礼します。新隊員の紅蘭を連れて来ました」

扉を開けると、大神と紅蘭が入ってきた。

「米田はん、久しぶりやな～。相変わらず飲んどるみたいやけど」

「ははは、まあな。お前こそ、花やしきには未練があったろう」

「構わんて。ウチは機械がいじれればそれでええんや」

さすが顔見知りだけあって、会話が弾む二人。
そこへ、紅蘭とは初対面の秀介が大神に紹介を求めた。

「隊長、こちらの方は？」

「今日から花組に加わる新隊員の李紅蘭だよ。紅蘭、隊員仲間の御剣　秀介だ」

「新入りさんかいな？ウチ李紅蘭いいます。よろしゅうな」

「御剣　秀介と申します。以後お見知り置きを」

軽く挨拶を済ませると、米田が口を開いた。

「知ってるか大神？紅蘭は華撃団の中でも機械に詳しくてな。光武を設計にも携わったんだぜ？」

「光武の設計！？凄いんだな紅蘭は」

「そんな事あらへんて。大神はんこそ、前の初戦は大勝利やったらしいしな」

素直に驚く大神に謙遜する紅蘭。
すると、大神も謙遜で返した。

「そんな事ないよ。花組のみんながいてくれたから、俺達は勝てたんだ」

「ええ事言うなあ大神はん。それでこそ花組の隊長や」

「確かに、僕もそう思います」

軍人というのは、何かについて手柄を自分のものにしたがる。

なぜなら、手柄の数はそのまま自分の評価に繋がるからだ。故に中間職の軍人になると、部下の手柄も独り占めする人間は腐るほどいる。
しかし、大神にはそれが全く感じられない。
帝都の平和を第一に考え、隊員一人一人を大切にする人間味に溢れた人物だ。
本当の意味で彼は軍人なのだと、秀介は思った。

その日の夜、秀介は大道具部屋で明日の公演の準備をしていた。
舞台袖に置くパネルや噴水のセットの清掃だけなので、たいして時間はかからないのだが、真面目な秀介はついでに部屋全体を綺麗にしようと考えたのである。
「こんな所でしょうか……」
見違えるほど綺麗になった部屋に頷き、道具を片付け始める秀介。
そこへ、さくらがやって来た。
「あ、秀介さん……」
「さくらさんじゃないですか。どうしたんです？こんな時間に」

思いがけずさくらと二人きりになれたからか、普段より少し上機嫌になる秀介。
一方、さくらはいつもより表情に元気がなかった。

「今日のあたし達の舞台、見て頂けました？」

「ええ、もちろん。紅蘭さんは初舞台だったんですよね」

あの後、紅蘭は米田に頼んでこの日から舞台に立たせて貰う事になった。
当然ワンシーン限りの脇役だが、あのコミカルさが客に強いインパクトを与え、主役のさくらが霞むほどであった。
ちなみにその時、秀介はさくらしか見ていなかったのは余談だが。
いずれにせよ、今日の舞台で李紅蘭という花形スターが誕生したのは事実だ。

「びっくりしました。紅蘭って、初めて舞台に立つのに全然緊張してなくて……。あたしなんか、主役になっただけで震えが止まらなかったのに……」

それは、劣等感だった。
さくらが不安に思えてならなかった事を、紅蘭は塵にも感じておらず、さくらが一ヶ月かかったスターへの階段を、紅蘭はたった一回の、それも初舞台の公演で登ってしまったのだ。

「それで？」

「時々、迷う時があるんです。明らかに紅蘭の方があたしより上手なのに、あたしが主役をやっててていいのかなって……」

「気にする事ではありませんよ」

「……え？」

あまりにあっさりと言う秀介に驚いたのか、さくらは目を丸くした。

「何もかも同じ人間というのは存在しません。早く才能を開花させる人もいれば、反対に時間のかかる人もいます」

「……」

「でも、結局誰も自分の演技しかできないんです。紅蘭さんは笑わせる演技がピカイチなように、さくらさんも感動させる演技は誰にも負けないと、僕は思うんですが……」

「秀介さん……、ありがとうございます。あたし、そう言って貰えたの初めて……」

余程秀介の言葉が嬉しかったのか、さくらは頬に手を当てて恥じらいを見せた。

「あ、い、いや、まあ……はい……」

それを見た秀介も、顔を真っ赤にして目を逸らす。

すると、さくらが何か閃いたように言った。

「あ、そうだ。秀介さん今から時間ありますか？」

「え！？　……ええ、暇ですが……何か？」

目的が分からず尋ねると、さくらは秀介の手をとって言った。
「だったら、あたしのお芝居の練習に付き合って下さい！」
「へっ！？　僕がですか？」
突然のさくらからの申し出に、秀介は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。
「いや、でも……僕は芝居は素人ですし……」
「そんな事ないですよ。前に大神さんに付き合ってもらった時も、ためになりましたし」
刹那、秀介の眉がピクッと上がった。
「（なんですと？　隊長を部屋に入れた？）」
油断した、と秀介は思った。
まさかこんな早くから部屋に入れる程の仲になっていたとは……。
「……あ、あの、秀介さん？」
突然俯いて拳を震わせ始めた秀介に驚いて手を離すさくら。
すると、今度は秀介の方からさくらの手を握ってきた。
「さくらさんっ！！」

「は、はい！？」

凄まじい気迫の秀介に気圧されつつ返事するさくら。

「その話、喜んで引き受けます！　是非、お手伝いさせて下さい！！」

そう言ってさらに力を込めてさくらの手を握る秀介。

さくらは首を縦に振る事しか出来なかった。

「……それじゃあ、始めますね」

念願叶ってさくらの部屋に来た秀介は、さくらに来月公演予定の『シンデレラ』の台本を渡された。

花組の芝居のスタンスは、芝居を途切れさせない事にある。

公演と公演の間に期間が空くと、ライバルの活動写真に客を奪われる可能性があるからだ。

しかし、役者も人間である以上稽古は必要不可欠であるため、一つの舞台を演じる傍ら、次の舞台に備えなくてはならないのだ。

そのため、花組の役者は基本的に二人一組で主役を担当し、個人の演技力に合わせて調整するようにしている。

そうする事で、少しでも役者の負担を減らそうというのだ。

さくらは現在公演中の『愛ゆえに』ではヒロインのクレモンティーヌを、さらに次回公演予定の『シンデレラ』でも主役を勤める事になっている。
同じく主役を勤めるマリアと比べても、演じる時間や台詞の数は群を抜いて多い。
そのため、今の内から立ち稽古を始めないと、間に合わないのだ。

「今日は……、第三場面の魔法使いがシンデレラに魔法をかける所です」

「は、はあ……」

必死に台本を見て該当部分を探す秀介。
一方のさくらはもう台詞を暗記しているのか、台本を置いてスタンバイしている。

「それじゃあ秀介さん、行きますよ？」

「は、はい……！」

「よーい……、スタート！」

「ああ……、お姉様もお母様も酷いわ。私も舞踏会に行きたいのに……クスン……。」

「おお、可哀相なシンデレラ……。私が貴女を助けてあげましょう。」

「まあ、貴方は一体……？」

「名乗る程ではない魔法使いです。さあ、貴方の願いを言ってご覧なさい。」

「はい、ドレスを着て馬車に乗って、舞踏会に行きたいんです。」

「わかりました。では……、アブダラカブダラ……以下省略。」

「わあ、凄い！ドレスと馬車だ。」

「シンデレラ、この魔法は12時までしかもたないからね。それまでに帰るんですよ。」

「はい！ありがとう魔法使いさん！」

「凄いじゃないですか秀介さん！　本当に初めてなんですか？」

「いや……、何だか気持ちが出ちゃって……」

恥ずかしそうに頭を掻く秀介。
実際に芝居の立ち稽古をしたのは初めてなのだが、シンデレラを（と言うよりさくらを）助けたいという気持ちが伝わっており、充分客に見せられるレベルだった。
秀介としては、さくらに褒めて貰えた事が一番嬉しいのだが。

「秀介さん。よかったら、これからもあたしの稽古に付き合ってくれませんか？」

「はい、僕でよければ喜んで」

秀介は、心の中でガッツポーズをキメていた。

翌日、仕事を一通り終えた大神は、秀介と揃って「愛ゆえに」の舞台を見るために舞台袖に来ていた。

「これは……、ちょうど盛り上がりのシーンだな」

「あ、秀介。お兄ちゃんも」

二人に気づいたアイリスが小声で反応した。
袖には出番を終えた紅蘭とすみれの姿もある。

「二人とも、ええ所に来たな。いよいよ山場やで」

「オンドレ様、どうか私と一緒にお逃げ下さい！」

「……使命も部下も捨てて貴女と逃げ出す私など、最早私ではな

い。クレモンティーヌ、貴女はそんな私を愛せるのか？」

「オンドレ様！」

「……全く、田舎臭いったらありゃしない。よくあんな演技で泣けますわね」

すみれが呆れた表情でため息をつく。
すると、二人のシーンに若干涙ぐんでいたアイリスが言い返した。

「すみれ、うるさい！」

「それにしてもさくらはん、何や輝いてるな～。マリアはんもはまりすぎや。女の子が失神するで」

「フフッ……」

紅蘭の一言に、秀介は一人笑みを浮かべた。

しかし、この後舞台は予想だにしない事態に見舞われる事になる。

「オンドレ様！！」

そう叫んでマリアの下へ駆けるさくら。
しかし、あまりに役になりすぎたためか、足を滑らせて倒れそうになる。

「あらっ！？……っと……っと……！」

さくらはそのままマリアを通過。
終いにはすみれ達のいる舞台袖の掴んで倒れてしまった。
因みに帝劇の舞台は袖がセットと同じレールから下がっており、ストッパーの役目をしている。
つまり……、

「うわぁっ、セットが！」

大神は思わず叫んだが、それすら掻き消す轟音が舞台を襲った。
天井からはスポットライトが雨霰のように降り注ぎ、セットは噴水から何から全部大破し、後ろの背景幕すら破れる始末。
最早芝居どころではなかった。

「あちゃー、えらいこっちゃ……」

変わり果てた舞台に唖然とする紅蘭。
すると、すみれが憤怒の形相で立ち上がった。

「もう堪忍袋の緒が切れましたわ！ちょっとさくらさん！！」

「あ、すみれ～駄目だよ～！」

アイリスの静止も聞かず、すみれは舞台に上がってさくらを怒鳴りつけた。

「舞台をこんなに壊してどうするおつもり！？冗談じゃありませんわ！」

「……すみません」

「貴女って人は本当にトロ臭い、どん臭い、おまけに田舎臭い……！臭い臭いの三拍子ですわ！」

半ばキレているためか、大袈裟に鼻を摘んで見せるすみれ。
すると、さくらもカチンときたらしく、すみれを睨み返した。

「NGの回数はすみれさんに負けますけどね」

「まあ、さくらさん！セットを壊してその態度、許しません事よ！」

「二人とも本番中よ！やめなさい！」

必死に二人を説得するマリアだが、状況が状況だけに効果がない。

「アカンで大神はん。二人を止めんと……」

「お兄ちゃん、何とかして～！」

袖であたふたする二人。
そんな中、袖で一人どす黒い殺気を放つ者がいた。
そう、秀介である。
「あの高飛車女……、叩っ斬る！！」

「いいっ！？」

怒りの余りブレスレットからスパークソードを召喚する秀介。
スパークソードを初めて見る大神は、仰天しつつを秀介を止めようと試みた。

「待て秀介、落ち着くんだ！」

「離して下さい隊長！さくらさんを侮辱する奴は僕が許しません！」
「今は本番中だぞ！！君が行けばますます騒ぎが大きくなる。」
「くっ……！」
何とか秀介を羽交い締めにする大神。
しかしその時、舞台の天井から何かが軋む音が聞こえた。
「……？……、大神はん！照明のバーが崩れかかっとる！このままやとライトが全部落っこちるで！！」
「何っ！」
紅蘭に言われて天井を見ると、さっきの衝撃で傾いた照明のバーが折れかかっていた。
舞台の三人は気づいていない。
大神は大声で叫んだ。
「みんな逃げろ！舞台が崩れるぞっ！！」
「お、大神さん！」
大神の声に気づいた三人が上を見る。
と同時に照明のバーが音を立てて折れた。
「きゃあああああっ！」
「うわぁぁぁぁぁ……！！」

「あれえええええっ！？」

「ぬおおおぉぉ……！！」

役者達の悲鳴とともに、舞台は完全に崩壊した。

「舞台が……、何て事なの……。」

マリアはただ、そう呟くしかなかった。

「……にしても、隊長も随分無茶な要求を呑みましたね」

「仕方ないさ。仲間の失敗は俺の失敗でもある」

秀介の言葉ににこやかに返す大神。

あの後、セットの壊した責任で責められたさくらを不憫に思った大神は、代わりにセットの修理をすると言い出したのだ。

しかし、帝劇のセットは専門のプロが作ったもので、本物に瓜二つの完成度でなければならない。

さらにセットだけでなく、照明や舞台の床も修理しなくてはならないのだ。

舞台については素人同然の大神に一人で出来るはずもないのだが、それでも彼は引き受けてしまった。
お人よしなのか、どこまでも隊長の義務に忠実なのか……。
秀介には、イマイチそれがわからなかった。

「それに秀介、君こそ何で俺を手伝ってくれるんだ？」

「え？」

急に聞き返され、秀介は思わずバーをどかす手を止めた。

「俺は隊長の義務としてやっているが、秀介は何でわざわざ俺を手伝ってくれるんだ？」

「……」

秀介は押し黙った。そして、しばらく黙ったのち、こう言った。

「仲間を助けるのに、理由がいるんですか？」

「秀介……」

大神は意外そうな目で秀介を見た。
しかし、秀介はそれ以上口にする事なく作業を再開した。
大神は何やら秀介の言葉に感動したようだが、実際の理由はそれだけではない。
大神がさくらを庇った時に、さくらがまたしても顔を真っ赤にしていたからである。
つまり、かなりカッコイイ事を言ったように見えて、実際は単なる対抗意識だったりする。

すると、そこへ話題の人物が現れた。

「大神さん……」

「やあ、さくらくん。まだ休んでなかったのかい？」

大神が尋ねると、さくらは暗い表情で答えた。

「……ごめんなさい。あたしのせいで二人には迷惑をかけて……」

「大丈夫さ。心配ないよ」

「それに、自分を責める事はありません」

落ち込んだ様子のさくらを気遣かって、笑顔を見せる二人。

さくらは、そのおかげか少し笑顔になった。

「あの、あたしにもお手伝いさせて下さい。壊しちゃったの、あたしだし……」

「そうだな、じゃあお願いするよ」

もしかしたら修理を手伝う事で、さくらの心も軽くなるかもしれない。

そう思った大神は、さくらの申し出を受ける事にした。

その時、舞台にアナウンスが流れた。

「御剣　秀介さん、支配人室までお越し下さい」

「よう秀介、悪いな仕事中によ」

支配人室に入った秀介をいつもの様子で迎える米田。
しかし、秀介はその隣に立つ女性に目がいった。
歳はさくら達より一世代程上だろうか。
赤みがかった長い茶髪を後ろで綺麗にまとめ、さくらとはまた違って大人の魅力を持った女性だった。

「紹介するぜ。帝国陸軍中尉にして帝国華撃団副司令、藤枝あやめくんだ」

「貴方が御剣　秀介くんね？はじめまして、藤枝あやめです」

「あ、はじめまして。御剣　秀介です」

あやめに一瞬目を奪われていたため、秀介はやや慌てて返事を返す。
すると、米田が意地悪に笑った。

「何だ秀介、あやめくんに惚れちまったか？さくらがヤキモチ焼くぜ？」

「なっ、そんなんじゃないですよ！」

慌てて弁明する秀介。

すると、あやめは上品な仕草で笑って言った。

「そうやって真面目な所、あの人にそっくりなのね」

「あの人……？ゾフィー兄さんの事ですか？」

驚いた表情で秀介が尋ねると、あやめは当然のように返した。

「もちろん、知ってるわ。彼は私達の戦友だったもの」

その表情には、どこか懐かしむように見える。

あやめもまた、米田と同様にゾフィーの仲間だったのだ。

「ところで長官？新隊長の大神少尉にも会っておきたいんですが。」

「隊長なら、舞台の修理をしています。呼んで来ましょうか？」

「それには及ばないわ。長官、行ってきますね」

そう言って、あやめは支配人室を後にした。

「……司令、あやめさんも兄さんと知り合いだったんですね」

「ああ、もう八年も前だがな……」

「……」

秀介が尋ねると、米田は悲しげに返した。

秀介は、まだ黙っている事しかできなかった。

翌日、花組の姿は舞台ではなく作戦司令室にあった。
上野公園に引き続き、黒之巣会が芝公園を襲撃したからである。
「芝公園言うたら、先週帝都タワーが建ったばっかやで」
「そんな大事な建物を壊される訳には行きませんね！」
紅蘭の言葉に意気込むさくら。
一方、秀介は対照的に疑問符を浮かべた。
「帝都タワーってなんですか？」
「帝都全体の電波を管理する、巨大なアンテナのような建物よ」
「もしタワーが破壊されたら、帝都全体の電波システムがマヒしてまうで」
「よし、帝国華撃団花組は直ちに現場に出動。帝都タワーを防衛しつつ、敵を全滅させる。いいな！」
米田が力強い言葉で花組を激励する。
それに答えるように、大神が出撃命令を出した。

「帝国華撃団花組、出撃！！目標地点、芝公園！」

「「了解！」」

「……で、僕らはまた留守番ですか？」

「アイリスつまんな～い！」

花組が飛行船、翔鯨丸で出撃する様子を窓から眺めつつ、秀介とアイリスは不満を口にした。

「いや～、お前の分まで轟雷号に入らなくてよ。まあ、勘弁な」

「前に何とかするとおっしゃったじゃないですか」

「仕方ねぇだろ！まさか先に向こうが仕掛けてくるとは思わなかったんだからよ！」

司令室での言い争いが続く中、アイリスはやれやれといった表情で呟いた。

「早く大人になりたいな……」

突如として襲撃された芝公園。
脇侍が縦横無尽に暴れ回り、あちこちから煙が上がっている。
その中央で一際強い妖気を漂わせる者がいた。
黒之巣会首領、天海である。

「オンキリキリバサラウンバッタ、オンキリキリバサラウンバッタ、オンキリキリバサラウンバッタ……」

天海が何やら怪しげな呪文を唱えた。
すると、上空からドリル状の巨大な物体が現れ、芝公園の地中深くに沈んでいく。
それを満足そうに見届け、天海は叫んだ。

「魔都の門は見えたり！！」

「そこまでや！！」

刹那、上空から五つの光武が派手に現れた。

「帝国華撃団、参上！！」

「むう……！」

叉丹をして侮れないと言わせた帝国華撃団。
天海は自分の存在に気付かれる前に、転移魔術で帝都タワーの真上に移った。

「帝国華撃団……、うぬらの戦い振りを見せて貰おう。」

「少尉、敵はやはり帝都タワーを狙っているようです」

開口一番、マリアが言った。

「帝都タワーを守る……、重大な任務だな」

改めて今回の戦いの厳しさを痛感し、大神は脳内で素早く戦術を組み立てる。

刹那、紅蘭が何かに気づいて叫んだ。

「みんな、散るんやっ！！」

その声に反応して五人が一斉にその場を離れる。

その瞬間、大神達のいた場所に火球が炸裂した。

その火球の飛んできた方向を見ると、固定式の砲台が設置されていた。

「あれは……、砲台か？」

初めて見る兵器に驚く大神。

すると、紅蘭がそれを破壊しつつ答えた。

「あれは『蒸気火栓』っちゅうドイツで開発された破壊兵器や。今みたいな火球で攻撃するんやけど、正面しか狙えんちゅう弱点のた

めにお蔵入りになったんや」
見れば、芝公園の至る所に蒸気火栓が設置されている。
しかし、帝都タワーを守るためには迅速に脇侍を全滅させなくてはならない。
大神は脳内の戦術を再構築し、命令を出した。
「よし、帝都タワー防衛のために魔装機兵を全滅させる。行くぞっ！」
「「了解！」」

蒸気火栓と言う新しい兵器の出現によって危ぶまれた芝公園の戦いだが、大神の戦略の前には敵ではなかった。
遠距離攻撃に優れたマリアと紅蘭が砲台を狙い撃ち、さくらとすみれが大神とともに二人を援護する。
この作戦が功を成し、火栓は花組にさしたる打撃を与えられぬまま沈黙した。
こうなれば、大神達の障害は何もなかった。
「これで終わりか……」

最後の思われる脇侍を切り倒し、大神が呟く。
しかし、まだ終わりではなかった。
「いいえ少尉、あれを見て下さい！」
マリアが帝都タワーの真上を指差す。
そこには、如何にも悪者らしい威厳を妖気とともに漂わせる者が、大神達を見下ろしていた。
「そうか、こ奴らが叉丹の言う……」
天海が小声で呟くと、白い光武が刀を突き付けた。
「貴様、一体何者だ！？」
大神の鋭い声が飛ぶ。
しかし、天海は大神の問に嘲笑を以って返した。
「我は天海！この汚れきった帝都を破壊し、真の日本を蘇らせる者なり！」
刹那、天海の妖力が上昇する。
「何ですの、この妖気……！脇侍とは桁違いですわ！」
「みんな、気をつけろ。何を仕掛けてくるかわからないぞ？」
隊員達にそう言った時、大神は自身の後ろに凄まじい妖気を感じとった。

「何っ！？」

反射的に跳んで間合いを開くと、一体の大きな脇侍が刀を構えて立っていた。
漆黒の体から溢れる妖気は、脇侍とは明らかに違う。

「精々こやつと戯れているがよい」

そう言って、天海は転移魔術で消え失せてしまった。

「少尉、気をつけて下さい！今までの敵とは違います」

「わかった。みんな、充分注意して戦うんだ！」

「「了解！」」

「長官、芝公園に出現した巨大魔装機兵の妖力が増大しています！」

「何！？」

椿の報告に、米田は驚きを見せた。
ただでさえ強い妖力がこれ以上高まっては手に負えない。
案の定、花組は今の時点で苦戦を強いられている。
米田は一瞬考えた後、決断した。

「秀介、お前の出番だ！」

「待ってました！」

言うや、秀介は作戦司令室を飛び出した。

「……皆さん、今助けに参ります！」

秀介は人気のない所に移動し、ブレスレットを高々と空に掲げて叫んだ。

「ジャーーーーーーーック！！」

天海の生み出した巨大魔装機兵。

大神達は懸命に立ち向かうが、圧倒的な戦力差の前に苦戦を余儀な

くされていた。

「アカンで大神はん、こいつ計算以上の動きをしよる！」

「こちらの攻撃も通じませんわ！？」

「くそっ……何と言う強さだ！」

その剛腕から繰り出される一撃は地を砕き、その漆黒の鎧は大神達の攻撃を一切受け付けない。
まさに手も足も出ないとは、この事だった。

「……大神さん、さっきから気になってたんですが……」

ふと、さくらが口を開いた。

「この脇侍……、さっきより大きくなってません？」

「何……？」

言われて見ると、確かにそうだ。
最初は大神達の光武より一回り大きい程度だったのに対し、今の脇侍は帝都タワーの半分に匹敵する高さになっている。

「一体……、どういう事なんだ？」

大神がそう呟いた時、突如脇侍が仰向けに倒れた。
いや、倒されたのだ。
大神達を庇うように現れた救世主……、

「あれは……、ウルトラマン！？」
ウルトラマンジャックによって。
「シュワッ！」
ジャックは起き上がった脇侍にすかさず掴み掛かった。
脇侍を負けじとぶつかり合うが、大きさでジャックが勝っている分不利である。
「ヘッ！」
両手で高々と脇侍を持ち上げ、ジャックは勢い良くぶん投げた。
「シュワッ！！」
倒れた所にスペシウム光線を打ち込む。
しかし、次の瞬間信じられない事が起きた。
何と、脇侍はスペシウム光線を吸収して立ち上がったのだ。
それだけではない。
脇侍の体は、ジャックと変わらぬ大きさに肥大化したのである。
「ヘッ！？」
これにはジャックも驚きを隠せなかった。
その間にも、脇侍はジャックに襲い掛かる。
「ヘアッ！！」
再びぶつかり合う二人。

しかし今度は背丈も同じ分互角になる。
その時、大神がハッと気づいた。
「そうか……、奴は俺達の攻撃を吸収していたんだ！」
さっきジャックのスペシウム光線を吸収したのが何よりの証拠だ。
大神達の攻撃も吸収されていたとするならば、攻撃が通じない事も説明がつく。
「しかし、それではどう攻めれば良いのか……」
マリアがそう呟いた時、誰かから通信が入った。「こちら翔鯨丸、敵の本体を特定しました。これより本体を直接砲撃します」
刹那、上空の翔鯨丸から主砲が発射され、さくらの光武の近くに着弾した。
立ちのぼる煙。
その奥に、ジャックと戦う黒い脇侍とは別の白い脇侍が姿を現した。
「あれが本体ね。大神隊長、ウルトラマンが黒い脇侍を食い止めている間に本体を撃破して！」
見ると、ジャックは黒い脇侍を羽交い締めにしている。
「少尉、向こうもこちらに気づいたようです」
マリアの言う通り、白い脇侍はこちらに構わず、一目散に帝都タワーに向かっていた。
「ここまで来て逃がすものか！全員、本体に総攻撃せよ！」

「「了解！」」

五機の光武は、一斉に本体に攻撃を仕掛けた。

「そこっ！」

マリアの光武が本体の足を打ち抜いた。

しかし、本体はそれにも構わず走り続ける。

「さくらさん！」

「分かってます！」

今度はさくらとすみれが同時に左右から切り込むが、ギリギリで避けられてしまった。

だが、本体の逃亡をこれ以上許さない者がいた。

紅蘭の光武である。

「逃がさへんで！チビロボ軍団、発進！」

頭と両腕の大砲から、コイルのようなロボットが次々に発射され、本体を取り囲む。

「今がチャンスや！大神はん、一発かましたれ！！」

「分かった！」

チビロボ軍団が本体を捕らえている間に、大神は二刀を交差させ、精神を集中した。

「狼虎滅却……、快刀乱麻！！」

振り下ろされた二刀から緑色の電撃がほとばしり、白い脇侍を一撃で黒焦げにしてしまった。
それと同時に黒い脇侍も全身から煙を出す。

「シュワッ！」

ジャックが再びスペシウム光線を撃つと、今度は吸収する事なく爆発した。

「ご苦労様」

戦いを終えた大神達を待っていたのは、あやめだった。
先程の砲撃による援護は、彼女だったのである。

「あ、貴女は……」

「帝国華撃団副司令、藤枝あやめです。よろしくね、大神君」

正式な挨拶はまだだったのか、改めて自己紹介するあやめ。
すると、大神の顔が俄かに赤くなる。
「隊長には、瞬間の判断力が必要よ。これからもしっかりね、大神君」

「は、はい！頑張りまひゅ、が、がんば……！」

緊張したのか噛みまくりの大神に、隊員達は思わず吹き出した。

「……帝国華撃団、あくまでも我等の邪魔をするつもりか」

黒之巣会のアジトにて今の戦いを見ていた天海は、憤怒の形相で唸った。

「更にはあの巨人……。何人たりとも我が野望に仇なす輩は、闇に葬ってくれるわ！」

すると、それに答えるようにミロクが叫んだ。

「帝都殲滅！抹殺、帝国華撃団！」

運命の出会い（後書き）

《次回予告》

さよなら、私の青春…、

さよなら、私の恋…、

私の時間は、あの戦争で止まっている……。

次回、サクラ大戦！

《隊長として……》

大正さくらにロマンの嵐！

貴方は、隊長失格です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9891x/

桜舞う星

2011年10月28日12時17分発行